

つなぐ



諫早市立大草小学校
特別支援教育
コーディネーターだより
H31.2.28 No.38
文責 林田

😊 2枚のカードのその訳は… 😊

大草小の校長室の入口横の窓には、右のようなカードが置かれています。それは、なぜかと申しますと…。

子どもたちは、校長先生が大好きで、昼休みになるとしょっちゅう遊びのお誘いに行くのです。3年生以上の子は、少し遠慮がちに「校長先生、今日は遊べますか?」と尋ねていますが、1年生などは、「校長先生、遊びましょう。」と、まるで友達を誘うようにどんどん校長室に入っていきます。

大草小の子どもたちのことが大好きな校長先生は、忙しい時でも誘われると断ることが…。

そこで、前もって、右のようなカードで知らせることにしたのです。

昼休みだけでなく、ほんの少しの時間でも、子どもたちは校長室に立ち寄ります。担任に伝えればいいことでも、校長先生に報告することがあるくらいです。きっとそれは、「校長先生なら何でも受け止めてくださる」という安心感があるからだと思います。

子どもたちの安らぎの場「校長室」、もちろん職員も時々利用しています。保護者の皆さんも、ぜひおいでなさいませ(^-)-☆



😊 「安心感」と子どもの育ち 😊

子どもが生まれて最初に接するのは「家族」です。年齢が上がるにつれ、子どもたちの過ごす世界が広がっていきます。例えば、保育園や幼稚園、小学校や中学校…、そしていずれは就職するなどして一人暮らしを始めると、今まで知らなかった広い社会へと巣立つことになります。

子どもの世界を広げていくうえで大切なことは、子どもの「愛着」が形成されているかということです。

「愛着」をわかりやすく言うと「安心感」と言い換えることができるかもしれません。それは、子どもたちの心に、「困ったときは助けてくれる人(家族)がいる」「失敗しても帰ってこられる場所(家庭)がある」という安心感が根付いていると、様々なことに挑戦し、世界が広がっていくからです。

「愛着」は、以下のようにして形成されると言われています。

0歳後半・・・人見知りが始まる。安心できる人とそうでない人の識別を始める。
不安になると母親(安心できる人)に泣いて訴え、じっと見つめる。
1歳頃～・・・ハイハイをするようになると、不安になると母親(安心できる人)に
じり寄り(接近する)。歩けるようになると駆け寄る。



愛着行動を
繰り返す



愛着が形成される

「泣く」「見つめる」「接近する」という行動を愛着行動と言います。乳幼児期の子どもは、この愛着行動を繰り返し、そのたびに母親(安心できる人)に声をかけられたり抱きしめてもらったりすることで安心し(愛着が形成され)、また次の行動を起こすことができるのです。

もしも、子どもが泣いている時に気づいてもらえなかったらどうでしょうか?前号でお伝えした「スマホネグレクト」のような場合だと、子どもが泣いていても無視することになり、愛着が形成されないのは言うまでもありません。また、体罰や虐待などを受けた場合も、当然ながら愛着は形成されません。

子どもたちの世界を広げていくことができるように、家族と「愛着を形成」し、家庭が「安心できる場所」であることを願ってやみません。

なお、今回参考にした資料は、

「子育てで一番大切なこと～愛着形成と発達障害～ 杉山登志郎(著) 講談社現代新書」
です。興味がおありの方は、ご一読ください。